第23回夏季大学「新しい気象学」報告

今年度の夏季大学は，1989年7月25日～28日，「南極の自然と気象」というテーマを掲げて開講された．

会場は，東京の気象庁講堂を予定していたが，折悪しく，台風の接近と，伊豆半島東方沖海底火山の活動のため使えず，同ビル内の東京管区気象台会議室に変更された．会場の収容人員の都合上，申込みを制限した結果，受講者数は57名（昨年80名）であった．

講義の題名及び講師は次のとおりである．

（1） 南極観測入門　山本　哲（気象庁観測部）
（2） 南極はなぜ寒い？—熱収支と気候—　山内　恭（極地研究所）
（3） 南極のオゾンホール　忠鉢　繁（気象研究所）
（4） 天気図の話—南半球の天気図—　丸山健人（気象研究所）
（5） 天気図実習　丸山健人（同上）
（6） 極域の氷床コアと古気候・古環境　藤井理行（極地研究所）

その他，映画（第18次，第28次越冬隊記録），気象庁内見学を行った．見学コースも前に述べた理由から短縮され，参加者を残念がらせた．

今回の会場は，比較的狭かったため，講師の声がよく届き，講師・受講者の親近感が得られて質問も多く出るなど，受講者の評価はよかった．しかし，受講者数が少ないため，会計は，赤字になった．

「テキストを事前に送ってほしい」という前回受講者の要望を反映させて，84％の人が事前にテキストを手にでき好評であった．その陰には，講師の方々に原稿締切り日を早めてもらうなどの御協力と助力があった．

受講者の中から気象学にA，B会員あわせて9名の入会者を迎えられたことは喜こばしいことだった．

書籍の売れ行きも好調だった．夏季大学テキスト「新しい気象学」のバックナンバー44部，「気象学の手引(正・続)」7部のほか，「高層天気図を描く」(丸山健人著)10部，全気象労組編の「天気予報はどうなっているか」「気象最前線」「ゆれる日本列島」5部，という状況だった．従来，注文制としていたが，今回は，会場に直接販売コーナーを設けたことがよかった．

終了時に受講者を対象にアンケートを行った．その結果をさらに次回の運営改善のため役立てたい．

（教育と普及委員会）

編集後記：いま世界の政治・社会現象はめまぐるしく変化している．この方面の専門家は，これら変化の過程を分析し，それなりに現解しているに違いないが，誰がいったい今日の状況を正しく予測していたのであろうか？

地球の自然現象も複雑で，現在の状態は解析・研究すれば，かなりのところまで理解できると思われるが，将来どのように変化していくかの予測は，社会変化の予測と同じように，大変難しいのではなかろうか．

最近，地球温暖化・酸性雨・熱帯雨林の破壊・砂漠化などが深刻な「地球環境問題」になっている．われらの地球は，あらゆる専門分野がよってたかって研究しても，真実はすぐには解明できそうにもないし，また，それへの対処の仕方も決めがたい．

世論調査によれば，国民の環境問題に対する意識は高まっている．しかし，人類がどのようにしていけばよいかの具体的意識は固まっていないようである．世界の経済発展が続くかぎり，地球環境は変化していく．環境変化の阻止は不可能なことである．環境変化がゆっくりならよいが，急速な場合には人類はそれについていけない．このことが深刻である．

学会誌は，自然現象の理解のみならず，人々の意識の交流にも役立つものと思う．学会誌においては，基本的に，著者の自由な発想と表現が尊重されるべきである．異なる考え方が出されても，その採用の可否は読者の判断に任すべきだろう．著作品は，著者が全力をふるって研究し書かれたもので，編集委員やレフリーのところで長時間ほったらかしにされるのはよくない．

近年，学際的分野の学会が数多く発足している．いろいろの専門分野が情報交換することはよいことである．しかし，情報交換のために時間をとられ過ぎて，じっくり腰をすえて思考する余裕がなくなるのは困りものだ．情報を入れるだけでは，新しいことは生まれない．各自は情報をよく整理しなければならない．

この編集後記に，日ごろ考えてきたことを気ままに書かせてもらった．言葉の足りない点もあることをご容赦願いたい．

（J．K．）